

平成 29 年度 第 2 回

早稲田大学所沢校地 B 地区自然環境評価委員会

会 議 次 第

日時：平成 30 年 3 月 28 日（水）

15 時 30 分～

場所：早稲田大学 大隈会館

N 棟 301、302 会議室

1. 開会・あいさつ

2. 議 事

(1) 前回評価委員会議事録の承認について

(2) B 地区湿地再生等モニタリング調査の結果について

(3) 役員改選について

(4) その他

3. 閉 会

平成 29 年度 第 2 回早稲田大学所沢校地 B 地区自然環境評価委員会

日時：平成 30 年 3 月 28 日（水）15 時 30 分～17 時 30 分

場所：早稲田大学 大隈会館 N 棟 301、302 会議室

出席委員：A 委員長、B 委員、C 委員、D 委員

1. 開会・あいさつ

○評価委員会事務局（E）：それでは、定刻になりましたので、「平成 29 年度第 2 回早稲田大学所沢校地 B 地区自然環境評価委員会」を始めたいと思います。だいぶ春本番の気候になりまして、本日、大宮の事務所を出るときに、荒川流域でサクラソウの保全管理活動を長年やっている NPO の方から連絡が入りまして、サクラソウが例年ですと桜が終わった後、4 月に入ってから開花するのが一般的ですけれども、今年はかなり早く今日の時点でだいぶ花がほころび始めたとのこと。B 地区の湿地の管理と共通するところが多いのですが、荒川流域のサクラソウ自生地の湿地ではオギやヨシの茂った部分の草刈りを冬の間一生懸命行い、その枯草もどかして、日を当てることによってサクラソウを始めとした早春の希少で美しい植物が一気に開花して、毎年 4 月、今年は 4 月 7 日に、そのご褒美として、「サクラソウを愛でる会」のイベントをお餅を食べながら行う計画をしていたのですが、今年はもう花が終わってしまうな、ということを感じながら来たところです。年度末の忙しいなか、先生方にはお集まりいただきましてありがとうございます。委員会の開催に先立ちまして、早稲田大学の F 総務部長から最初にご挨拶を頂きます。

○早稲田大学総務部長（F）：ただいまご紹介をいただきました、総務部長を務めております F でございます。本日は年度末の大変お忙しい中を、評価委員の先生方にはご出席を賜

りまして、誠にありがとうございます。「早稲田大学所沢校地 B 地区自然環境評価委員会」は、通例年 2 回という形で行われておりまして、今回は早稲田キャンパスでご審議いただく機会ということになります。所沢校地 B 地区の湿地保全計画につきましては、2006 年に整備がなされまして、順応的管理の下で B 地区の状態あるいは調査の進捗を踏まえながら、2013 年それから 2017 年と新たな計画を提出してまいりました。これらは本委員会でのご承認をいただきながら、現在まで B 地区での取り組みの基礎となってきたという経緯でございます。本日は、前回の評価委員会以降の調査結果と取り組みを中心にご審議をいただきまして、先生方のご経験、ご専門のお立場から、今年度の総括と来年度の方針について、ご提言を賜ればと存じております。何卒よろしく願いいたします。

○評価委員会事務局 (E) : F 総務部長ありがとうございます。今日の委員会は、現時点での委員のメンバー全員がお揃いになっております。議事に入る前にまずは資料確認をさせていただきたいと思っております。お手元に会議次第 A4 一枚、自然環境評価委員会の前回議事録、10 月 31 日の議事録、それから自然環境調査室の G さんによる A4 の横綴じの資料、生態系保護協会による縦綴じになっておりますモニタリング調査結果、それから環境保全センターによる水質調査結果の縦に綴じた資料が配られておりますが、皆さんお揃いでしょうか。

それでは資料が揃っているようなので、議事次第に即して進めさせていただければと思います。この後の議事の運営につきましては、A 委員長にお願いしたいと思います。よろしく願いいたします。

2. 議事

(1) 前回評価委員会議事録の承認について

●A 委員長：A でございます。それでは恒例でございますが、まず第一に前回の委員会の議事録承認ということですが、お手元でございます前に郵送されていたかと思うのですが、ここはおかしいとか、表現がまずいとかいうようなことはございましたでしょうか。ございませんですね。それでは議事録承認ということで、よろしく願いいたします。

2 番目は、B 地区湿地再生等モニタリング調査結果についてのご報告を、お願いいたします。

(2) B 地区自然環境モニタリング調査の結果について

- 1) 早稲田大学自然環境調査室 (G)：説明省略
- 2) 早稲田大学環境保全センター (H)：説明省略
- 3) (公財) 埼玉県生態系保護協会 (E)：説明省略

【質疑応答】

●A 委員長：それではまず、自然環境調査室のほうから質疑応答を承りたいと思います。

●C 委員：カヤネズミの巣の数が今年減ったということですが、結構年による繁殖ステージの変化が多いと思うのですが、調査日時や調査方法、あるいは調査者が変わったとか、調査の方法等で影響が出たということは無いのでしょうか。

○早稲田大学自然環境調査室 (G)：まず調査日時については、1 月上旬から 2 月上旬の 1 ヶ月、例年 12 月中旬から 2 月上旬の範囲で 1 年分の営巣地点の調査を実施していますので、時期については例年通りです。調査のメンバーは、細かいところで言うと若干の出入りはありますが、基本的には私が随行して一緒にやっておりますので、調査

労力や質というところで変化があったわけではないと思います。

●C 委員：それではやっぱり実数が減ったということですね

●A 委員長：その件について、カヤネズミが捕食された、たとえばアライグマ等という
ようなことはございませんか。

○早稲田大学自然環境調査室 (G)：B 地区の中で実際踏査をしていて、たとえば捕食痕と
か、そういう形跡があったということは無いですね。アライグマに限って言いますと、
所沢市さんが我々までワナを仕掛けて捕獲、駆除に乗り出しているということもあり、
状況については共有されておりますが、現状で食害として断言できるものは無いと思
います。

●A 委員長：アカガエルとかトウキョウサンショウウオなども含めて減っているというこ
とで、最近アライグマが増えておりますので、私はその影響や被害があったのかなと
思ったのですが、それはないということよろしいですか。自然減ということ。

○早稲田大学自然環境調査室 (G)：カヤネズミについては、現時点では、年による増減の
変動の範囲内とも言えますし、今年 1 年の結果からは、私としても減少の原因を断定
できるところまではいっておりません。

●B 委員：同じく関連して、スライドの 7 番のところに経年的な増減のグラフがあります
けれど、2009 年と 2011 年が 2017 年と類似して少ないということがわかっています。
この 2 ヶ年は 17 年と比べて、何か条件的に同じようなことが見受けられたかどうか、

その辺はいかがでしょうか。

○早稲田大学自然環境調査室（G）：個人研究の形ではいくつかありましたが、2007年からB地区のヨシの全面的な刈り払いが始まっており、現在の形でのカヤネズミの調査もそこから始まっています。2008年から2010年は水田が拡張された年で、その際にヨシ等の抜根を実施していますが、カヤネズミの生息環境を大きく変える程の範囲では行っておりませんし、またその当時に比べて、劇的に管理方法が、たとえば今年だけ2009年、2011年と比較して、異なるというのは正直無いのかなと思います。

●B委員：なかなか難しいですね。こうした動物類の数の増減がままあることについては理解しているつもりですので、もし何か類似点があれば、ということでご質問しました。

●A委員長：D先生は、この件で何かございますか。

●D委員：パワーポイントの35枚目、保全計画2017年の着眼ということですが、Gさんが発表された部分も保護協会が発表した部分に関しても、細かいところとか実際に色々なことを全てやるといいますか、全体像をどのように捉えていくのがいいのかに繋がるのですが、今話そうとしているのはそこではなく、保全計画の部分での考え方、コンセプト、パワーポイントの350ページのコンセプトは、非常にいいコンセプトだと思っています。実際に、こういう水の循環の仕事であるとか、どうやって保持していくのか、ということの研究する人たちは、頭の中では考えることだと思うんですね。実際に森林が、簡単に言えば上流部の森林の量が、もっと言えば葉っぱの量が増えたときに、ではその水循環、水収支はどういう風に直接的、間接的に下流部の湿地に対

して影響を与えるかの話で、ここのところは研究という視点からも非常に面白い部分になると思うんですね。これを実際に進めようと思うと、蒸散によって LAI が増えたときに、蒸散がいったいどのくらい増えるのかとか、それから逆に地表面からの水の蒸発がどれくらい減少するのかとか、それらが当然複雑に絡み合ってくるわけで、その辺を進めていくときに、具体的にどんな感じでやられるのか、人手も結構かかる問題だと思うんですね。その辺の意見・考え方を、聞かせてもらえればと。次に繋がる、逆に言うと私がこの研究をやれといわれたときに、どういう風にどこをどうすると繋がってくるか、ディスカッションできるかなと思っているので、質問したいと思います。

○早稲田大学自然環境調査室 (G) : まず、この仮説の中で一番明らかになっていないところは、実際の水の量の部分です。湿地の中で言いますと、水位の変動量という形で以前に出させていただいておりますが、そこから例えば年間にどのくらいの水の量が動いているのか、というのはおおよその数で出すということは可能なのではないかと考えています。実際の計測としては蒸散量計を用いて、樹齢あるいは LAI の値等で樹木を選び、蒸散量を算出して、その面積ないし本数での積算ということで、おおよその水量というものを推定する。そこから、例えば 50 年前の林齢でいうとどのくらいの水の量の動きがあったのか、現在と比較してどうなのか、ということをシュミレーションしていくのが、スタンダードな展開ではないかと考えております。

●D 委員 : わかりました。最近は何れも計測器もすごく良くなってきて、さっと量を測って、それで水の動きを見る、ひとつの方法であると思って、具体的にデータでどうやって示すのかというところが、考え方はこういう考え方なんだろうけど、それがすごく大事だし、また研究としてはなかなか皆が手をつけられない部分なので、もしうまくデー

タが取れたら非常に面白いんじゃないか、と思って質問しました。以上です。

- A 委員長：それに絡むんですけれども、最近の降雨の傾向として、これは感覚的なものですが、いわゆる集中豪雨型の降雨が多いということになりますと、降雨量が多くても一度に流失する量も多くなって、保水量は少なくなっているのではないかと私は思っているのですが、その辺はうまく捉えられるものなんでしょうか。

- 早稲田大学自然環境調査室 (G)：そうですね、先ほど気候変動という話もあったのですが、降水のパターンとか、気温の上昇もそうなんですけれども、恐らくそういうものはあると思っています。今のご質問ですが、単位時間当たりで大量の水が流入すると、どこかで水位面が地表面と同等になるわけで、データ上これ以上水位が上がらない値があるはずですが、推定値にはなりますけれども、そのあふれる回数であったりとか、期間というものは計算で出せるんじゃないかなとは思っています。

- A 委員長：これがうまく捉えられると、素晴らしい業績になりますね。

- 早稲田大学自然環境調査室 (G)：狭山丘陵は色々な方々が保全管理の作業を行っているとありますが、B 地区は大学が管理する場所であり、単純に建物を建てるためのアセスメントとしてだけではなくて、大学という学術機関がこういった場所を維持管理する意味はどこにあるのか、ということを常に考えながら、積極的に保全とその活用に繋げる取り組みを続けていければと思っています。

- C 委員：関連してなんですけれども、気候変動とか、そういう色々な要素がというお話だったんですけれども、25 日に散策会で B 地区の湿地を通らせてもらったんですけど

も、そのときに地元の高齢の方が参加されていて、色々な話をしてくれたんですね。ここは昔セリ摘みをやったんだとか、いところがここで田んぼやって苦労してたとかの話をして、その中で吹っ張りの池で旦那衆は泳いでいたという、たぶん 60 年ぐらい前のことで、12 枚目のスライドの吹っ張りの池というのは一番下にある、今はほとんど水がたまってないので、掘ることを止めてるとい事情もあるようですが、子供たちが泳いでいたということで、やっぱり今よりは水が豊かだったのかなという気がしました。参考までに、紹介させていただきました。

●A 委員長：他に、ございますか。

●B 委員：後段でご説明いただいた、湿地の保全活動の状況に関連するんですけども、42 枚目のところに 2017 年度の参加者数、それぞれのメニューごとに載っていますけれど、先ほどは保全活動の中に楽しさも組み込んでというお話がありましたが、参加されている方が繰り返し参加されている方と、このメニューだけということで 1 回だけ参加という、その辺の分析はされていますか、いかがでしょうか。

○早稲田大学自然環境調査室（G）：9 割方、リピーターの方というか、地元の方です。

●B 委員：とすると、リピーターの方が周辺の方々を引き込んで来るとい、そういう繋ぎ方が求められる、動いていただけるメニューを検討する、ということになりますかね、ひとつは。リピーターの方がそれほど多いということは、かなり環境教育的にも掘り下げて学んでいただけているように思いますので、全体的にどういう組み立てで体験していただくことが効果的かを、そろそろ考えられても良いんじゃないかと思えます。以上です。

○早稲田大学自然環境調査室（G）：最初に4月に入って3月に出てきたときに、どういう知見があったりとか経験があったりとかのストーリーを考えることは、次のステップとしても検討しなくてはいけないことで、ご意見非常にありがたく思います。またどういう風に人を集めているかというところで申し上げますと、例えばホテルの観察会は所沢市の市報に出させていただいており、毎年100名前後の方々に来て頂いております。しかし、その方々の多くは年1回だけの参加になりがちで、なかなかそういう人達を、もう少し保全とか、活動として自然を守ることはどういう意味なのか、を学ぶところに引き込む工夫が確かに必要だな、と思っております。

●A委員長：蛍の場合は、市報に掲載してもらったとのことですが、他はどういうことを宣伝しているのでしょうか。私、この写真だけを拝見しますと、他の観察会に比べて若い人が多いように見えるんですけど、この若い人というのは学生さんだけなのでしょうか。それとも、もうちょっと学生よりお年を召した人が参加してるのでしょうか。いかがですか。

○早稲田大学自然環境調査室（G）：明らかに若い子達は、早稲田大学の学生たちです。それ以外には、ご年配の方がリタイアされた後に参加されることが多いですが、ここ数年の傾向では、30代や40代の子供連れの方が増えてきた傾向があります。一般に子供の遊び場として自然環境はどうしても危険というか、特にあまり馴染みのない方にとっては、汚れや怪我という点で若干二の足を踏むところもあるようですが、大学内での活動というのが、対人関係や設備利用なども含め、ある種の安心感があるのかなど。米づくりを行っている活動で、5～6歳や小学生低学年くらいの子たちをつれてくるということは、最近の傾向ではよくあります。その親御さんが、30代～40代と

いうところで、子どもへの教育と親御さんへの活動の周知や理解がすすめられると良いなと考えています。

●A 委員長：それはとても素晴らしいことだと思います。どこでの報告か忘れましてけれど、40代や50代の人たちはもはや雑木林は自分たちの故郷の原風景ではない、ということをお話しされましたけれど、大変心強いことだと思います。毎回市報に載せるほどのことでは無いのかも知れませんが、できるだけ宣伝をうまくやって多くの人を集めることは、積極的にやってもらいたいと思いますね。

●D 委員：宣伝部分に関しては、ホームページがあって、そこを見るといつ何をやっている、という風にはなってるんですね。

○早稲田大学自然環境調査室（G）：はい。なっております。

●D 委員：その辺の上手な使い方、宣伝の仕方によってずいぶん違うと思うので、同じことをやるにしても、外からの見え方ってずいぶん違うと思うので、それはまさに大学のこうした取り組みの部分が、周りから評価されるって部分なので、外から評価されるためだけにやっているわけではないけれど、せっかくやるならそういう部分を強調していい、大学にとっては非常にいいことではないかと思います。

●A 委員長：ありがとうございました。それでは他にございませんでしょうか。無いようでしたら、今度は生態系保護協会さんが調査された方に移りたいと思います。こちらの報告で、ご意見、ご質問いかがでしょうか。

●B 委員：先ほどのご報告と同様に、とてもわかりやすいまとめ方をしていただいたので、良く理解できましたけれど、ススキの多様性を高めるための分析の中でマクロ分析をされていますが、この中で日射量の分析を狭山丘陵を取り囲む周辺、広い範囲での分析をされているんですけど、これは基本的には地形と方位から日射量を算出するということになりませんか。

○埼玉県生態系保護協会（I）：その通りです、地形と傾斜の方位、傾斜角から自動で、コンピューターが計算した結果になります。

●B 委員：そうすると、水のほうの問題もそうでしたけれど、立地条件の基礎、基盤のところの分析、ということになるわけですね。

○埼玉県生態系保護協会（I）：はい。

●B 委員：それはこの草原再生区が、どのように位置づくのかっていうことで見えてくる部分が他の目標となる種の特徴がどうか、ということとの比較でわかるのですが、一般的には植物の群落が成り立つときには、種と種の関係が重要なポイントになってきますので、マクロな日射の条件に、いってみればミクロな植物の生育するときの立体的な条件、種それぞれの草丈の違いによる構造というか、そういう光条件が影響してくるはずなんです。この種に被陰されるとか被陰されないとか、そういうことが目標となる植物に影響しているはずなので、そこをきちっと捉えて解釈していかないとまずいかなという気がします。

●D 委員：ついでに、GIS の使い方の問題ですけど、位置情報システムを使うのに、全

体的な広い面積をターゲットにして、ここの部分は光環境がこうだった、それにともなって、水は方位が斜面がこうなっているのでこういう水条件だろう、そういう評価があると思うんですね、ここのところで僕が気になった部分は、ススキの多様性というところに、どういう種が入ってとか、個体同士や種同士でのコンペティションがあったり相互作用があって、そこに生育しないという話にたぶんターゲットを持っているんだと思いますが、それならば GIS でなくて、極端な言い方をすれば、現場で測れば良いのではないか。もちろん GIS 使って全体的に狭山丘陵なり、早稲田の B 地区を評価することは意味があると思うんですけど、その辺の繋がり方が、聞いてあまりピンとこなかった、というのが私の印象です。

○埼玉県生態系保護協会 (I) : 良いススキ原で直接計測すればいい、というお話なんですけれど、確かにそうですが、レファレンスとするようなススキと標徴種が一緒にいる良いススキ原は一ヶ所、果樹園東のススキ原としてご紹介したんですけども、ここ一ヶ所しかないんですね。そうすると、比較は対一でしか出来なくなってしまう、それだとどのような立地条件がいいのかを、対一だともし特異な場所だったら、うまく比較ができないので、今回はとりあえずなるべく多くの地点での情報を集めて、その情報と比較するのが良いのではないかという考えで、こうした解析をしました。狭山丘陵内に、多くのレファレンスとなるススキ原があると良いですけども、とりあえず標徴種はどういう地形のところに生育するのか、ということを決回は解析しました。

●D 委員 : うまく目的とするところへ繋がっていけば良いと思うんですけど、その辺がどうなのかという感じがしたので、感想を言いました。

●A 委員長：これは私の勘なんですけれど、狭山丘陵の希少種が混ざっているススキ原っていうのは、昔はやっぱりススキを刈って、あるいは焼き払って、しょっちゅう手入れをしていたわけですね。最近はそういうことをしなくなって、どんどんススキだけが広がっていると思うんですね。そうしますと、自然災害、たとえば土砂の流失とか、そういう攪乱されたところで希少種やススキ群落の標徴種が根付くのではないかと、全部ススキが一面に繁茂しているところで他の目標とする植物が入ってくるのは難しいのではないかと、そういう風に思うのですがいかがでしょうか。

○埼玉県生態系保護協会（E）：A 委員長が言うとおりでと思うんですけれど、これまで、先ほど写真で見ていただきましたように、元々ススキは何も無かった畑の放棄跡地からススキ草地を造って、15年間にわたり冬に草刈りするだけの自然状態の中で、種の多様性に富んだススキ群落が開発可能かということを見てきたわけです。ススキ群落の標徴種も、それぞれ分散や定着するための条件、個別に見ますと重力、あるいは風、動物が種子を運んできて分散・定着するという条件、あとひとつはそもそも土の中に埋土種子があって、そこから出るということで、標徴種が発生するメカニズムとして、大きく種子散布形態と、埋土種子の有無という条件が想定されると思います。15年たつて、あの場所はその2つの条件がすでに無く、自然状態のままススキ群落として植物種の多様化を図ることには限界があると思うものですから、そうすると昔ながらのススキ群落と共生していた植物を生育させるには、生育のための環境条件を客観的に把握して、ある程度人為的な計画に基づいて生育させる、あるいは生育条件に基づく一定の管理が必要ではないかと思えます。それで、先ほど端折ってしまって、詳しい説明はできませんでしたが、資料内のススキ原の創出全体計画という表が1枚入っていると思います。その中のステップCに示されていますが、先ほどご指摘いただきました、GISの分析は、あくまで地形的な要因に基づくマクロな基盤条件、というレ

ベルの資料と思っています。(3) のところの 1) がそういう意味で GIS 使ってどうい
う傾向があるのかを見たわけですけど、2) のところで B 先生と D 先生からご指摘
いただいたように、目標とする標徴種が生育している場所の、光の条件（光量子束密
度）ですとか、土壌水分の条件を実際の生育場所で測定して、それが今回の試験区
の中で、そうした条件があるのかどうかを今後検討していく必要があることを示した
のが、(3) のところなんです。それから少しさかのぼると、(2) でこれも前回ご指摘いた
だいていましたが、そもそも現状でススキがあれだけ密生していると光条件、あるいは
それに伴う乾燥化という、地表面の明るい暗いや、乾湿という前提があります。昔な
がらの多様性の高いススキ群落とは、そもそもの適正な株密度がどのくらいなのかを
把握する必要があると思います。担当から話がありましたように、狭山丘陵北側の埼
玉県側ではレファレンスとして理想的なススキ群落は一ヶ所しかなかったんですけ
れども、今後は東京側も含めて、種の多様性が高いススキ群落が残っている場所を探
して、たとえば 5m かあるいは 10m 程のコードラートを設定し、ススキの株密度はど
くらいの値が適正なのか、それと比べて今の試験区のススキの状態がどうなのか。そ
れらのことを数量的に把握しながら種の多様化試験が進められると良いのではない
かと思っています。

●A 委員長：他に、ございませんでしょうか。

●D 委員：全体に関わる部分に話がってしまうかもしれませんが、よろしいです
か。このプログラム自体が多岐に渡っているので、聞いていた印象としては、あれも
これも全て色々なことを、データを取って解析をしていく方向で話が進んでいっ
ていると思います。たぶん大事な部分というのは、G さんの配った 1 枚目のパワーポイン
トにある『B 地区環境管理方針』というものがあります。常にそこに戻る、戻るとい

うか、聞いてて何をどのように進めるとの部分、色々な研究が行われてきていて、今なっていると思います。もう少しうまい整理ができないのかなという点で、たとえば管理をすることによってあの湿地を維持していく、その管理としても色々な管理の仕方があって、今までの経験や意見を入れながら、その管理というのを決めてきていると思います。その管理に対しても、植生全体がどうなるのかもあるし、多様性にも絡んで希少種や外来種はどうなるのか、植物だけではなく、これに昆虫が入ってきたり、非常に複雑になってきて、うまく整理ができると、ひとつの方向を向いた、ターゲットが非常にはっきりした形で、このプログラムが動くんじゃないかと思うんですね。この「環境管理方針」には出ていませんけれど、たとえば“生態系サービス”という言葉が最近によく使われていて、そこには種の多様性がどうなのかとか、生態系が持っている機能はどうなのかとか、その生態系というものが人間に対してどういう安らぎを与えるのかとか、それからその生態系を使って若い人たち、人間、我々をどういう風に環境というものに対する教育の場として利用していくのか、という風な考え方があります。そういう視点で見たときに、ここで取り組んでいる湿地をどういう位置付けに、どういう風に捉えればいいのか、という部分でもしかするとうまくまとまるのではないかと思うのです。非常に多岐な話題で聞いていてとても面白いんですけど、なにかひとつのまとまりで整理できたら、聞いている方もさらに面白い、評価する先生方にももっと意見を出してもらって進められるのではないかと思います。もちろん現状で十分に仕事しているというのは重々把握、その上のレベルとしての話なんですけれども、そんな印象を受けています。以上です。すみません、厳しい注文をつけた感じになってしまいました。

- A 委員長：ありがとうございました。うまくまとめていただいたようで、ありがたいと思います。他に、ございませんでしょうか。

ともかく、早稲田大学の校地は背景に狭山丘陵全体を含んだ土地を背負っていますので、生き物は常に移動して良い環境を探していますので、B地区の湿地でマルタンヤシマのヤゴが見つかったというのは、すごいなあと思いますし、ススキ原の中でヒメカマキリモドキが確認されたというのも、これからのススキ原での取り組みを予見するような、瑞兆を感じます。

- C 委員：みどりの森博物館の、入間市域・所沢市域で、同じように湿地の整備をやって、モニタリング調査もやっていると思うんですけど、狭山丘陵内でも大谷戸湿地とこのB地区の湿地で違いがありますよね。ヌマトラノオでしたっけ、あれは大谷戸湿地の方には普通に見られるというのがありますし、八幡湿地でも色々な整備をやってモニタリング調査を県でやっていると思うんですけど、こうした取り組みは情報交換しながら進めた方が良くと思います。

- A 委員長：どうもありがとうございました。それでは、この議事は終わりと致します。

(3) 役員改選について

- A 委員長：次に3番目の役員の改選ということでございますけど、実は私自身がこの委員会を立ち上げたときから、ずっと関わらせて頂いて今、年齢85です。記憶力も薄れてきましたし、足腰も思わしくないので、ここでご辞退させて頂こうと思いますので、よろしくお願ひします。

○評価委員会事務局 (E)：今、A委員長から委員長と、あと委員としても退任したい、という話があったと思いますが、そういうことでよろしいですか。

●A 委員長：はい。

○埼玉県生態系保護協会（E）：委員長からの希望がございましたので、事務局としてこの委員会の設置要綱を確認しまして、第4条の「役員」という規定に基づきますと委員の中から互選によってA委員長の後任の委員長を決めて頂く手続きになっています。そういうことで、今日ご出席の委員の中から委員長候補をご推薦いただけるとありがたいと思うのですが、いかがでしょうか。

●C 委員：はい。どうもA委員長、長い間お疲れ様でした。推薦ということで、私はB委員を委員長に推薦したいと思います。

○評価委員会事務局（E）：はい。今、C委員からご推薦のあったB先生ですが、B先生もこの委員会が設立した当初から継続してご指導いただいています。A委員長そしてD先生、B先生のご推薦に対してはいかがでしょう。よろしいですか。

●A 委員長、D 委員：はい。

○評価委員会事務局（E）：それでは全委員の了解を得ましたので、ぜひB先生に委員長にご就任いただくということで、一言よろしく申し上げます。

●B 委員：とてもA委員長の後任は荷が重くて務めにくいですが、会議の進行役という立場でしたら引き受けることができますと思いますので、よろしく申し上げます。

●A 委員長：それではB先生、来年度からひとつよろしく申し上げます。

○評価委員会事務局（E）：それと委員退任の申し出につきましても、A 委員長からございましたので、後任の委員ということでもご議論頂ければと思います。今、資料をお配りさせていただいております。お手元にプロフィールが配布されましたが、新たな委員として大正大学の人間環境学科の教授であります L 先生が望ましいのではないかとということで、A 委員長と早稲田大学とも協議させていただき、事務局として推薦したいと思います。L 先生は県内の川越に在住で、ご専門は環境教育や環境社会学ですけれども、この委員会でもこの数年間はこの B 地区の湿地等についての教育的な活用、それも学生だけではなく先ほど G さんからも話がありましたように市民も含めて、どういう教育的な活用を展開していくか、あるいは B 地区の価値を社会的な意義としてどういう風に位置づけアピールしていくか、がかなり主要なテーマになってきていると思います。そういう意味では、生き物が直接のご専門ではないのですが、環境教育や環境社会学の視点で L 先生にご尽力頂ければと思い、推薦させていただきました。L 先生は動植物がご専門ではないとはいえ、荒川等での自然環境の委員会や審議会等でも活躍頂いていまして、特に野鳥に関しては造詣が深いこともあるようですので、ぜひ委員としてお迎えできれば、と事務局としては考えております。いかがでしょうか。

●委員一同：はい。意義なしです。

○評価委員会事務局（E）：ありがとうございました。それでは、委員として次回の評価委員会から L 先生をお迎えして、委員会が開催できるように進めたいと思います。それともう一点だけ事務局の方から、ご連絡させていただきたいことがあります。前回の委員会の時に、委員の K 先生がお亡くなりになったことをご報告しましたが、そ

の後任である委員の話も多少出ていたのですが、K 先生の場合はこの委員会の設立の経緯の中で、今日もオブザーバーとしてお見えになっている「狭山丘陵の環境を守る連絡会議」からの推薦枠として、K 先生が委員として継続していただいています。K 先生の後任の委員の選出については、まだ調整中の段階ですので、次回の委員会でお諮りするということになることを、ご了承頂ければと思います。そういうことで議事の 3、役員改選につきましては事務局から提案させていただきました。A 委員長におかれましては、平成 24 年 10 月から足掛け 6 年にわたり委員長としてご指導いただき本当にありがとうございます。また今後も、色々ご相談やご指導頂く機会もあると思いますので、ぜひともよろしく願いいたします。

3 番の議事については、これで終わらせていただきます。

(4) その他

- A 委員長：それでは (4) の議題で、「その他」ということで、この項はオブザーバーの方のご発言なんですけども、今回は埼玉県も所沢市の方も欠席ということで、「狭山丘陵の環境を守る連絡会議」の J さん、一言お願いします。

○連絡会議 (J)：連絡会議の J です。今日は、現地調査による最新の報告について、どうもありがとうございました。議事がここまで来てしまうと、前の問題に遡った質問はしにくいのでどうしようか今迷っています。現在、K 先生の追悼集の作成で四苦八苦しておりますので、中々勉強できなくて恐縮ですけれども、G さんに質問したいのですが、保全活動の参加者で東京都側の人もいるのでしょうか？

○早稲田大学自然環境調査室 (G)：はい、いらっしゃいます。東村山市、清瀬市、あと練馬区の方も参加されていらっしゃいます。

○連絡会議 (J) : 東京都側で活動をしていると、この B 地区での活動に参加してきたという方が結構いるので、そういう人達がどういう広報の手段で知るのが気になりました。やはり人づてに聞くことが多いようですが、そういうことを大切にするのも良いと思いました。それと、東京都側では今外来種であるキタリスの問題ばかり騒いでますが、B 地区のアライグマの現状の話も聞きたかったです。トウキョウサンショウウオもそうなのですが、アカガエルもアライグマが攻撃・食害してしまい、今年はアカガエルの卵塊が各地で見られないと聞いています。アライグマが直接関係しているかどうかはわかりませんが、B 地区ではトウキョウサンショウウオの卵塊が 10 とのことでしたが、アカガエルの卵塊の方はどうだったのでしょうか？

○早稲田大学自然環境調査室 (G) : 昨年のアカガエルの卵塊が 40 でしたが、今年が 3 月 6 日の調査がピークで 56 卵塊となり微増でした。しかし、その前はおそらく 100 単位であったので、現在その回復過程であるというべきなのか判断が難しいですが、昨年より多いというのは救いです。

○連絡会議 (J) : 狭山丘陵全体での生物多様性保全に興味があるので、最も大切な B 地区がどういう状況にあるのか、という心配があります。あと、オオムラサキの件ですが、樹液の出る樹は敷地内でどの位あるのでしょうか？

○早稲田大学自然環境調査室 (G) : B 地区でいいますと、クヌギの一本が多く樹液を出す樹だったのですが、数年前にそれが枯れてしまって、継続的に確認できる樹が見当たらない状況になっています。

○連絡会議（J）：是非 B 地区内にクヌギを育てて欲しいと思います。コナラの樹液は、3 年くらいでダメになってしまいます。クヌギの方が長いので、クヌギの方がオオムラサキの密源としては良いのかなという感想を持っています。質問と意見は以上になります。いつも B 地区の自然環境を守る精力的な活動を進めていただき感謝しております。

●A 委員長：それでは、これで事務局にお返しいたします。

○評価委員会事務局（E）：本日も、活発なご議論をいただきましてありがとうございます。いただいたご意見、特に狭山丘陵全体の保全との関連性ですとか、B 地区全体の方向性やアピールのしかた等について再度整理し、今後の B 地区での活動をどのように積み上げていくかという点について、次回は所沢の現地で夏から秋にかけての期間に開催させていただくことになると思いますけれども、それに向けて議論が深められればと思います。本日は年度末のお忙しい中、長時間に渡りご議論いただきましてありがとうございます。また、A 委員長におかれましては、長期にわたりこの委員会をご指導いただき、本当にありがとうございました。これにて、「早稲田大学所沢校地 B 地区自然環境評価委員会」を終わらせていただきます。

●A 委員長：最後に、つたない委員長で色々と委員会が滞ったこともございましたが、どうも長い間ご支援いただきましてありがとうございました。

以上